

【活動報告】

サービス・流通連合が取り組むまちづくり

講師 浦井 紀 彰：サービス・流通連合兵庫県支部支部長

○司会

それでは、活動報告ということで、働き方、生活についてということで、一つは労働組合が取り組んでいる取り組み、もう一つは兵庫県が取り組んでいる取り組みということで、ご報告をいただきたいというふうに思います。

まず最初に、サービス・流通連合が取り組むまちづくり、安心して生活できる社会の創造へということで、サービス・流通連合の浦井支部長にお願いをいたします

○浦井

1. 自己紹介

みなさん、こんにちは。サービス・流通連合兵庫県支部で支部長をしています浦井と言います。

今日の内容ですが、全体のテーマからすれば外れている部分もあるかと思います。ただ

1日を「仕事時間」と「それ以外の時間」に分けて考えた時に、「それ以外の時間」をいかに充実したものにするのか、といった視点から見れば、参考になることもあるのでは...との思いから話をさせていただくことにしました。ご理解の上お聞きいただければ幸いです。



まず簡単にサービス・流通連合の紹介をさせていただきます。私達は主に百貨店やチェーンストア・専門店など流通産業に関係する組合が加盟する産別で、兵庫県支部では私の出身単組であるコープこうべをはじめ5組織が活動をしています。それ以外にも高島屋や伊勢丹をはじめ地元の大丸・そごう・

阪神阪急等の百貨店、イズミヤやライフ等のスーパーなど、全国では135組織約22万人の規模です。特徴としては組合員に女性が多い(全体の60%を超える)、パートタイマーを含む非正規労働者が多い(全体の40%を超える)、などが挙げられるでしょうか。これからも労働組合だけでなく、お客様としてのご利用も含め、お付き合いをよろしく申し上げます。

2. なぜ労働組合がまちづくり？

ではなぜ「まちづくり」を政策として掲げ、活動を進めることになったのか、そのきっかけから話をしましょう。ここにいる多くの労働組合のみなさん同様、私達も2001年に3組織が合流して、1つの産別組織になりました。当然、新しい組織としてどのような

政策を掲げ活動していくのか、活動を進める上で幹となる部分について、議論を進めました。その中でそもそも社会は労働組合をどう見ているのだろうか、何を期待しているのだろうか、といった視点から考えますと「国民の意識と乖離した政策・運動になっているのでは」「組織率を見ても過半数を大幅に下回っている」課題があり、「現状の労働組合は労働者を代表する組織とは言い難い」状況ではないのか、との認識に達したのです。そしてこれからの労働運動を進めていくためには「あらためて地域社会とともに活動を進めることで、労働組合の社会的役割を果たしていかなければならない」との考え方の下、それを実現するための1つの政策として「組合員が一市民として自らの手でまちづくりを行ない、その運動を通じ把握した地域の諸課題を、労組役員として政策に反映させる」ことを目指した「まちづくり政策」が生まれることとなったのです。

もちろん私どもの産業は、地域が元気でなければ毎日の商売が成り立ちません。あらためて地域とともに運動を進めるという視点は、考えれば当たり前の視点なのですが、具体的にどのような活動を進めていけばいいのかという運動面では、組織内でもさまざまな意見が飛び交い、最初は苦労も多かったと記憶しています。

しかし考えてみれば、例えば一市民として自分が住んでいるまちは、どういう特徴があるまちなのかと問われた時に、抽象的な話しか出来ないということは、やはり恥ずかしいですね。それこそ私どもはその地域を対象に商売をさせていただいている訳ですから...もっとまちに興味をもって活動を進めていこうという考え方は、少しずつですが組織に浸透していったように思います。

3. 当時の「まち」を取り巻く環境

ここで実際に活動をスタートした当時のまちを取り巻く環境について話をしましょう。この中にも商店街のシャッター街という言葉聞いたことがある人も多いと思いますが、地方の都市を中心に市街地の空洞化が大きな社会問題になりつつあったのが、バブル経済がはじけた1990年代後半だったのでしょうか。国も何とかしようと俗に言う「まちづくり三法(都市計画法・中心市街地の活性化法・大店立地法)」の施行や改正などを進めたのですが、(もちろん成果をあげた事例もありましたが)多くのまちでは中心に建物は立っても人の賑わいが戻らないという、地域に根付かない状況が多く見られたように思います。地方の方なら理解されると思いますが、例えば鉄道の駅が再開発等で建て直されてきれいになったけれども、時間によっては下車しても駅員もおらず、以前は多くの人で賑わっていた駅の周りがむしろ寂しくなったと感じた人も多いと思います。対策が間違っているわけではないけれども、本当にこのやり方でいいのか、という思いはそれぞれの地域にあったと思いますし、人を中心としたまちづくりは、むしろ地域からも求められていたように思います。

とここまで理論的な話をしてきましたが、具体的な取り組みを説明した方がより理解も深まると思いますので、いくつかの活動を紹介します。

4. 取り組み事例紹介(その①-兵庫県の場合)

それではまず地元兵庫県の取り組みから話をしたいと思います。先ほど、もっと自分の地域・まちを知らなければ...という問題意識を話しましたが、そのことを踏まえ「見てみ

よう！県の姿」をテーマに、兵庫県の特徴(強み・弱み)を知る活動を進めてきました。具体的には自分達での調査や外部の調査機関による人口・経済・産業等さまざまな分析データなど資料を基にした意見交換会の実施、兵庫県や連合兵庫にご協力をいただき懇談する機会や他の産業で働く人たちへのインタビュー等、私達以外の方に参加いただき、違った視点からさまざまな意見を集めるなど、取り組みを進めました。それらの活動を進めた結果、私達メンバーの地元に対する理解が深まったと思います。

(少し話がそれますが)私自身も多くの発見がありました。例えば兵庫県の方と懇談をした際に、「兵庫のすがた」という広報物を資料としていただいたのですが、その中で兵庫県や神戸市が日本一となっている商品を紹介するページがありました。工業製品では肉製品やマーガリン、清酒・洗濯石けん・のこぎり・畳(いずれも出荷額)、農林水産物では酒米や



はも、ズワイガニ(いずれも出荷量)等、これほど多くあることには正直驚きました。これ以外でも多くのことを学びましたが、もし取り組んでいなければ、自分の住んでいる地域の魅力に気付かないままに、生活をしていたかもしれません。振り返れば自分にとっても有意義な時間であったと思っています。

結果として、集めた多くの意見・資料を基に委員会メンバーとしては「兵庫県の宝もの(強み)」として①文化・スポーツの盛んな地域②魅力ある食材が多くある地域、を選びました。現在はその宝ものを地域の活動に活かすことで活性化することが出来ないか、引き続き検討・研究を行なっているところです。

一つの例なのですが、東京の百貨店では食材として兵庫祭りをするとき、神戸肉など昔からの有名ブランドも確かに人気なのですが、例えば季節食材として秋の丹波の黒豆が大きなブームになったことがあったそうです。商品の調達ルートや物流など課題も多いため簡単には出来ませんが、上手にやれば地域が活性化することに大きく寄与することが出来るのではないのでしょうか。

またスポーツ文化ということでは、兵庫県はプロ・アマ問わずスポーツ各種において名門のチームが多くあります。最近こそファンを増やそうということで市民目線での活動が増えてはいますが、もう少し大胆に、例えば地方に一部の活動拠点を動かすことは出来ないか、そのことで都市部と郡部の交流や新たな人の動きが出来ないか、しいては兵庫県全体が活性化できないかということについても、検討してみる価値はあるかもしれません。どちらも非常に大きなレベルでの話であるため、自分たちで出来るものであるのかどうかも含め、取り組みを進めていきたいと思っています。

まだまだ兵庫県の場合は、ある意味机の上だけの取り組みに止まっています。しかし全国ではいくつかの都道府県でさらに運動を進めているところもあります。次にそういった事例についていくつか紹介しましょう。

5. 取り組み事例紹介(その②-他地域の場合)

○広島県の取り組み

広島県には3つのプロ組織があります。ご存知ですか？野球が好きな人は広島東洋カープを、サッカーが好きな人であればサンフレッチェ広島を思い浮かべると思うのですが、さてあと1つは…。音楽が好きな人は知っているかもしれません。中国地方唯一の日本オーケストラ連盟加盟組織、広島交響楽団です。この県では宝ものを「広島3大プロ組織」とし、各組織を応援することで町を盛り上げていこうという運動を進めています。資料ではカープフォーラムというイベントを紹介していますが、地域の住民とプロのメンバーが交流を深めることによって、地域を活性化していこうという取り組みは、私たちにとっても参考になる部分が多いのではないのでしょうか。

○愛媛県の取り組み

愛媛県では宝ものをずばり「観光資源」として、取り組んでいます。特に松山市が進めている「坂の上の雲」まちづくり活動では、ボランティアスタッフの派遣を積極的に行なうなど、行政と一緒に進めています。ちなみに「坂の上の雲」とは作家司馬遼太郎さんの代表作の一つ、もちろん舞台は松山です。NHKのドラマでも放映されていることから、ご存知の人もいるかもしれません。地域にあるさまざまな観光名所をあらためて整備・紹介し、観光客を増やすことで、まちの活性化を目指しています。

○高知県の取り組み

高知県は宝ものとして「森」を挙げて運動を進めていました。高知県と言えば、海と山に囲まれた自然溢れる地域をイメージする人も多いと思います。しかし逆に言えば、多くのまちで高齢化・少子化が進み、地域によってはまちそのものの存続が難しい状況になりつつあり、限界集落として社会問題になりつつあります。限界集落と言うものは65歳以上の高齢者の方が5割を超えてしまった地域のことですが、高知県の場合は実に8割近くがそのような状況になっており、買い物に行くにも行けない、お店がないという地域も増えています。そうなれば生活が出来ません。

そのために、地元のスーパーが移動買い物バスを出して地域の生活者を支えているのですが、当然そのような地域で商売をしても、お客様が少ないために収支が合わない。もし廃止になればまちが死んでしまう、何とか地域で成り立たせようということで、連合高知にも協力をいただきながら、行政と連携し地域生活のインフラづくりを目指し、取り組みを進めています。

6. 最後に

まだまだいい事例があるのですが…早いものでもうお約束の時間となってしまいました。私の話し方が悪くどこまでご理解いただけたか心配なのですが…。最後にもう一度この取り組みを進める目的を話して終わりたいと思います。

社会が大きく変革していく中で、ここにあるとおり21世紀の働き方ということに関して、私達も考えていかなければならない課題であることは、ここにいるみなさんも理解されることだと思います。今日の私の提案は、一労働者として役割を果たす前に、一市民として果たすべき役割があるのではないかというのが結論です。税金を納めましょう、教育を受けましょうという憲法に定められているのではなく、その以前に、それぞれが住む

地域がどれだけ魅力があって、すばらしい場所かということ相互にアピールし、人が行き来するようになれば閉塞感溢れる地域を変えることが出来るのではないか。最終的には組合員1人1人が地域デビューすることによって、地域が活性化だけでなく、本人が活動を通じて組合活動にも参加し組合も活性化する、と言ったウインウインの関係も夢ではないと思うのですが...

最終的には、きょうのテーマに対する答えというよりも問題提起という形での発表に近いと思います。私も組合役員ですから、どうしてもこの時期は春の交渉で頭がいっぱいで、このような活動に対する意識は薄くなりがちです。しかしこの取り組みの重要性も理解しています。引き続きこの取り組みも継続して進めていきます。みなさんにもさまざまな場面で御協力いただくことがあるかもしれません。ぜひよろしくお願いします。

簡単ですが、以上とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。まちづくりということで、労働組合が取り組んでいる事例報告なり、考え方について浦井支部長の方から報告をいただきました。